

列車は水溜が終着

私は昭和十四年から二十五年まで山線に勤めていたのですが、私の父(竹次郎氏)も、山線に関係していました。

苫小牧で海師をしていた父は、大正の終わり頃に現在の第一発電所に移り、職

が、列車は水溜(第二発電所)までしか動いていなかったもので、父はトロツコを馬で引いて第四発電所と水溜の間を行き来して、水溜にあった苫小牧小学校に通う第四発電所の子供たちや荷物を運搬していた

やってきました。

私が学校に通う年頃になると、私の家は煙の上に移っていました。その当時の苫小牧小学校は児童が六七十人で、先生が三人だったと聞きます。

冬はスキーをばいて学校

事をしていたのですが、登校途中「上」の印の入ったザックを背負ったその祖父とすれ違ふのです。そこからは祖父の足跡がついているのでラッセルも羨び、お互いにホッと、祖父はヒゲが凍りついた顔をこつこ

第四発電所までは馬車トロツコで

をかせました。私がおもいつかぬころです。父は「馬車トロツコを動かしていたのだ」と言っていました。

山線の線路は第四発電所まで通ってはいたのです

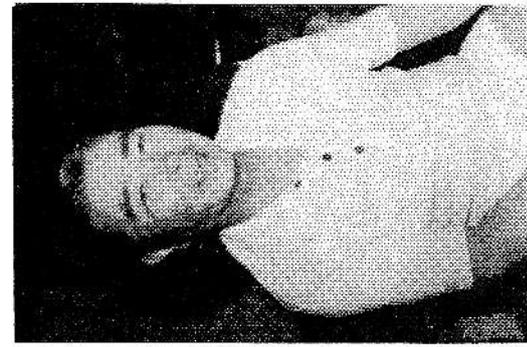
といひます。

冬は第四発電所の子供たちは学校の近くの倉庫所に入るのですが、正月や土曜日などには父の引く馬車りで家へ帰り、また倉庫所へ

へ通いました。三十分ほどで着くのですが新雪の後はラッセルが大変でした。私の祖父(工藤政次郎氏)が祖母と一緒に第二発電所に住んでいて、郵便配達の仕事

へ向けて「お家へ行く」と声をかけられるのです。その頃のついでに話を聞かすべく聞かすいませう。その

頃祖父は、もう七十歳近くになっていたはずですが、苫小牧市小糸井町一ノ七八木 政雄さんとの談



版画・能登正智さん(苫小牧市糸井389の9)一水溜一

走れ思い出

山線軌道

>7<

第一発電所
千歳川のナ
ツツコの溜の跡を契機
に、王子製紙苫小牧工場
建設の第一歩として明治
四十年五月、千歳川水路
工事が着手された。水路
は三千六百円で当時日本
最長。発電所建設は「タ
コ部屋」による強制労働
が行われた。建設費には
八百万円程度を要すると
され、同十二年十二月、
二千五百基発電機四台を
備えた水力発電所が竣工
した。